

中学校入学前の英語学習がそれ以降の 動機づけや英語能力に与える影響

大 北 恵里奈

1. はじめに

近年、日本のグローバル化が急速に進んでいる。また、人口減少に伴い、日本の企業の中には海外進出を図るものも出てきている。日本企業の海外進出は今後さらに増えていくと予想される。

そんな中、2020年には東京オリンピックの開催が予定され、日本は道路整備や施設、警備対策などの準備に追われている。オリンピックに参加する選手だけで1万1千人、それに加え1000万人が観客として東京を訪れると予想されている。施設などの確保も重要な問題だが、これだけ多くの観光客を目の前に日本人は英語でおもてなしができる英語力を持っているのだろうか。

語学教育のEF Education First 社が行ったアンケート調査において「東京五輪のボランティアスタッフに参加したいですか」及び「ボランティアスタッフとして活躍できる語学力をもっていますか」の質問への回答結果は「参加したい」が8割、一方「語学力には自信がない」も8割だった。実際、オリンピックの開催時期には観光客が世界中から日本を訪れ、交通機関や宿泊施設はもちろん、町中に外国人があふれ、英語でのコミュニケーションを余儀なくされることもあるだろう。一般の人も英語のコミュニケーション能力が必要とされるかもしれない。現在そのような必要性に応じてEF Education First 社が東京オリンピックの語学トレーニングパートナーとしてバスやタクシーの運転手、ボランティア参加者など英語の運用が必要とされる人を対象に無償で「語学トレーニング」を提供している。このように、日本人はオリンピック開催国として英語力が求められていると言える。

グローバル化に伴い英語の重要性も重視され、最近では、早い時期から英語学習をさせるのが良いとして、英語学習を行う幼稚園も増えている。また、文部科学省(2008)は「小学校英語教育」を2011年から、「外国語活動」として全国の公立小学校で必修化した。この「外国語活動」は小学校5・6年生に必修化されているが、文部科学省は新た

に2020年から小学校3・4年生に「外国語活動」を引き下げ、小学校5・6年生からは成績評価をする教科として「外国語科」を導入することを決定している。このように世代や年齢に関わらず英語の必要性が高まっている。また、早い時期から英語学習を開始しようとする傾向が強くみられる。

そこで中学校入学前に英語学習を開始した人と中学校以降に英語学習を開始した人の英語能力を比較し、早期英語教育の効果を確かめたいと考えた。グローバル化が進む中、次世代を担う子供の英語教育を強化する必要がある。文部科学省は現在小学校での英語教育を強化しようとしているが、実際、それが英語力の向上につながっているかについて疑問に思った。平成23年度から始まった「新学習指導要領」により、小学校5・6年生の英語活動が開始されたが、当時小学校5・6年生だった人は現在まだ高校2・3年生である。そのため、小学校英語活動が必修化された最初の世代は、まだ大学に進学しておらず、小学校英語教育の結果として、高校、大学の英語に対する態度や能力がどのようになっているかに関する研究は少ない。したがって、中学校以前の英語学習は大学における動機づけや英語能力に与える影響について明らかにするために、現役の大学生にアンケート調査をすることで上記を明らかにし、さらには早期英語教育の重要性について今後の展望、早期英語教育の在り方について考えていきたいと思う。

2. 先行研究の概要

2.1. 現在の動機づけ・英語能力について

恵・横川・三浦（1996）は早期英語教育経験者とそうでない人、それぞれ中2、中3、高1にアンケート調査を行い、リーディングとリスニング能力において早期英語教育の影響があるのかを研究している。恵らは先行研究としてJASTECプロジェクトチーム（1988a）を上げている。この研究では、2つの中学校の生徒、中1、中3、高2を対象として英語能力を調査した結果が提示され特にリスニング能力に関して、1つの中学校ではすべての学年で早期英語教育経験者（Ex）が優位、一方もう1つの中学校では中3で早期英語教育経験者（Ex）とそうでない人（Non-Ex）の間で逆転現象がみられると報告されている。この結果を受けて、恵・横川・三浦（1996）は再調査を行い、「リスニングの技能はいずれの学年においてもExはNon-Exより有意に優れていた。一方リーディングの技能は平均点には若干の差がみられたが有意差はなかった。」（p.32）と報告している。

また、高橋・大野・柳（2016）も「外国語活動で養成された『聞くこと』『読むこと』

の能力について」(p.139)と題し、早期英語教育のリーディング、リスニング能力への影響を論じている。対象者は国際的な活動に力を入れている都内の私立中学生とし、TOEFL Primary テスト結果から分析を行っている。リーディングとリスニングの能力の比較では、「リスニングの得点が有意に高かった。これは小学校の外国語活動で「音声中心」の学習を生徒らが体験してきたことが影響していると考えられる」(p.139)と述べ、早期英語教育とリスニング能力の関連を明らかにしている。

上記、恵・横川・三浦 (1996)、高橋・大野・柳 (2016)、JASTEC プロジェクトチーム (1988) は早期英語教育がリスニング能力に影響を与えているとしているが、一方、Iwata (2012) は「開始時期の遅い早いリスニング、文法、語彙、リーディングのどの能力においても効果をもたらす結果を導くことはなかった。」(p.81)と結果を示し、早期英語教育のリスニング能力に与えるポジティブな影響を否定した。

2.2. 現在までの動機づけ・英語能力の変化について

中学校以前の英語学習がその後の英語能力、動機づけに及ぼす影響を Takagi (2003) が研究している。早期英語教育を経験していた人とそうでない人を対象として行った調査では、早期英語教育は中学校での英語学習に対する動機づけや英語能力に影響するが、高校生と大学生の英語学習に対する動機づけや英語能力にはほとんど影響しないと結論づけている。同様に、JASTEC プロジェクトチーム (1994) は早期英語教育経験者とそうでない人を比較し、動機づけと能力を研究している。結果として、早期英語教育経験者の方が、授業以外の英語学習や外国人との交流に積極的な態度を示していた。それを踏まえて、「早期英語教育は、学習者の現在の学習だけでなく、将来の英語および英語以外の外国語学習に対する学習意欲を高める役割を果たす」(p.42)と述べている。この研究結果は、早期英語教育が高校生や大学生の動機づけや英語能力にほとんど影響しないという Takagi (2003) の研究結果とは異なっている。

次に、小学校から大学における動機づけの変化を構造的に見た研究であるが岡田 (2010) はメタ分析的手法を用い、動機づけを自律的-統制的な次元で捉え、外発的動機づけから内発的動機づけまでの間に4つの概念を定義している。岡田は、自律的な動機づけを同一化的調整と内発的動機づけ、統制的な動機づけを外発的調整と取り入的調整としている。結果として、「小学生と大学生においては、統制的な動機づけ(外発的調整、取り入的調整)と自律的な動機づけ(同一化的調整、内発的動機づけ)が比較的独立している一方で中学校と高校においては、すべての動機づけ概念間に生の関連が見られ

た。」(p.414)と報告している。中学生と高校生の結果では、自律的動機づけと統制的動機づけに明確にできなかった。その結果において、岡田は「動機づけのタイプの違いよりも、学習に対して動機づけられているか否かの点での個人差が大きい」(p.420)と結論づけている。JASTEC プロジェクトチーム (1988b) は、中1、中3、高2を対象に実施したリスニングとリーディングのテスト、JASTEC プロジェクトチーム (1986)、そして、JASTEC プロジェクトチーム (1987) の結果をもとに英語能力 (リスニング、リーディング、スピーキング) に関して、早期英語教育の影響をまとめ、3技能とも、「長期的な視点から見れば非常に有効である」(p.54)と報告している。上に述べた3技能をさらに細かくみると、高2まででみれば、リスニング、リーディングの概要・要点の把握、スピーキングの発話量・滑らかさにおいてよい結果となり、早期英語教育が有効性を明らかにしている。しかし、「『英語の規則に対する正確さ』という点では、高2の段階までは、学習者にそれほどプラスの影響を与えていないという事実」に注目しなくてはならない。」(p.55)と結論付けている。

2.3. 動機づけと英語能力の関係について

英語学習に対する動機づけと英語能力の関係の研究は多くあり、また多説見られる。英語学習に対する動機づけと英語能力の関係については、喜田 (2008)、池中 (2008)、Iwata (2012)の報告がある。喜田 (2008) は大学生を対象に学力テストと質問紙調査を行い、動機づけを消極的な単一目的と積極的な多目的で捉え、「英語学習で積極的な多目的をもって学習しているグループは消極的な単一目的のグループと比較して学力が有意に高い」(p.79)と報告している。また、池中 (2008) は早期英語学習経験者とそうでない人を対象に短期大学生にアンケート調査を行い、動機づけに関しては「年数を経るにしたがって、英語学習への関心が薄れていっている」(p.85)、英語能力に関してはリスニング能力において、早期英語学習経験者とそうでない人での TOEIC のスコアは「早期英語学習経験者がそうでない学生より高いスコアを取得していることが明確になった」(p.85)と報告している。英語学習に対する動機づけと英語能力の関係については、高い英語能力を身につけるには、「初期段階の早期英語教育を有効に行うこと」、「学年ごとに、次の段階での関心、意欲が継続的に持てるようなカリキュラムを作成する必要がある」(p.85)と結論づけている。また、松宮 (2009) は早期英語教育経験者 (FS) とそうでない人 (NFS) を対象とした研究を行い、「FS 群の情意要因が有意に高くなっていることが確認できた。一方スキル面においては、両群間における有意差は認められなかつ

た。」(p.156)と結論付けている。池中(2008)と喜田(2008)は早期英語教育と動機づけ・能力の関係性を示したが、松宮(2009)とIwata(2012)はこれらの関係性について否定した。このように動機づけと英語能力の関係性は諸説あり、さらに検討する必要がある。

以上の早期英語教育が動機づけや英語能力に与える影響の先行研究においては、中学生や高校生における動機づけや英語能力に関しての結果が多く、大学生に関する研究は少なかった。また、リスニング能力や動機づけと英語能力の関係性については様々な研究結果があり、早期英語教育の効果について明らかでない部分も多かった。本研究では、以上のことを踏まえ以下の研究課題について調査する。

3. 研究課題

①中学校入学前に英語学習を開始した人と中学校入学以降に英語学習を開始した人の現在の動機づけと現在の英語能力はどのように関係するのか

②中学校入学前に英語学習を開始した人と中学校入学以降に英語学習を開始した人の現在までの動機づけと英語能力はどう変化しているのか

③中学校入学前に英語学習を開始した人の中で所属する専攻の違いで生じる動機づけと英語能力の違いはどのようなものか。

4. 研究方法

4.1. 調査

アンケート調査は2017年の7月と10月に分けて全て質問紙で実施し、東京女子大学の学生104人分のアンケート回答を回収した。専攻は日本文学専攻(以下〈日〉と記す)(55人)、英語文学文化専攻(以下〈英〉と記す)(43人)、キャリア・イングリッシュ課程生(以下〈キャ〉と記す)(6人)である。アンケートのすべての項目を回答している者のみ有効とし、回答していない箇所がある者については無効とした結果、101人(〈日〉53人、〈英〉42人、〈キャ〉6人)を有効回答とした。

アンケートは動機づけについての設問、英語能力についての設問、意欲変化をグラフに書き込む自由記述の設問で構成され、それぞれを中学校時代、高校時代、現在に分けて質問した。動機づけの質問は16問、英語能力の質問は21問であった。

英語能力を測る設問では、「英検 Can-do リスト」を参照し、質問項目を作成した。中学校、高校、現在と学校段階が上がるごとに、英語能力は高くなると予測し、中学校では Can-do リストの 3 級、高校で 2 級、現在は準 1 級を参照し、アンケートを作成した。回答方法は、選択肢から選択する方式で、回答に関しては、選択方式で、主には 4 段階に項目分けし「できる、少しできる、あまりできない、全くできない」、「全部理解できた、少し理解できた、あまり理解できなかった、全く理解できなかった」「とても思う、少し思う、あまり思わない、全く思わない」といった 4 段階の選択肢から回答してもらった。

4.2. 分析

まず初めに、有効回答者を中学校入学前に英語学習を開始した人（以下〈以前〉と記す）(86人)と中学校入学以降に英語学習を開始した人（以下〈以降〉と記す）(15人)に分類して比較分析を行った。また、〈以前〉のグループを専攻別に分けて専攻比較も行った。分析に関しては研究課題に沿って、動機づけについての質問、英語能力についての質問に分けて行った。4 技能の能力を 1 つの図で専攻比較するため、Q11～15、Q22～25、Q33～36の項目において「できる、少しできる、あまりできない、全くできない」を順に $4 \cdot 3 \cdot 2 \cdot 1$ 点に換算し、 $(4 \times \text{人数} + 3 \times \text{人数} + 2 \times \text{人数} + 1 \times \text{人数}) \div (\text{最大値 } 4 \times \text{人数}) \times 100 = \%$ を計算することで 4 技能と中学校時代、高校時代、大学時代の能力の変化を比較した。中学校時代の話す能力を測る質問は Q13 と Q14 の 2 つあったが、学校段階ごとの能力の変化分析の際、高校時代と現在の質問と内容を揃えるため、分析においてはのみ Q13 のみを用いた。また、現在の動機づけを測る Q30-1 と Q31-1 「授業以外、学校以外の英語学習状況」においても、中学校時代、高校時代と揃えるため、動機づけ変化においては Q31-1 を分析で用いた。

さらに、英語能力に関して同じ基準で比較できるようにするため、「英語 4 技能試験情報サイト」の「資格・検定 CEFR の対照表」を用いて、アンケート調査の資格取得情報をレベルに当てはめて統一した。なお、TOEIC と英検を両方持っている回答者に関しては TOEIC の点数を適用した。意欲変化をグラフに記入する設問においては自由記述形式をとったため、分類分けにおける基準がなく自身の判断によるものだった。アンケート回答に全く同じものは一つもないため、公正を図るため本稿の執筆者ともう 1 名の分析者で分類した。アンケート回答者がそれぞれ異なるデータを示したため、変化の起点についても同様に 2 名で分類を行った。

5. 結果

5.1. 中学校入学前に英語学習を開始した人の中学校入学前の英語学習状況

中学校入学前の英語学習経験者が中学校入学前に行っていた学習について6項目質問した。Q2では「開始年齢」について聞いた。以下は英語学習を開始した年齢の図である。

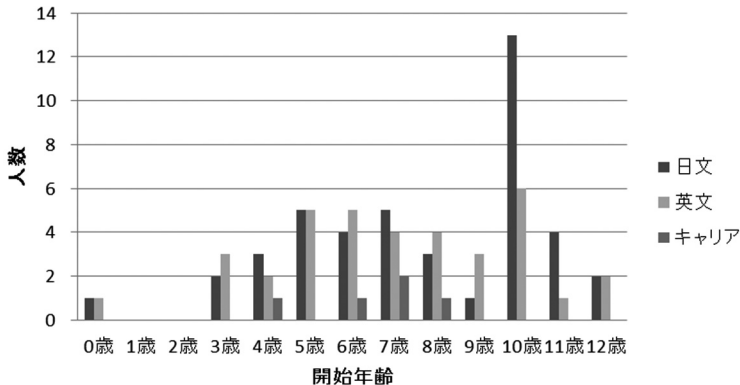


図1 英語学習開始年齢：専攻別

〈日〉は10歳での開始が最も多く、5歳・7歳と続く。10歳の開始は小学校5年生とみられ、小学校での外国語活動が開始がきっかけとなっている。〈英〉は10歳と並んで、5・6歳が多い。〈キャ〉は7歳が一番多かった。〈日〉と比較すると全体として、〈英〉と〈キャ〉が〈日〉よりも英語学習を始めるのが早かったことがわかった。Q3-2「入学前に英語に触れていた場所」の質問については(表1)、全体では、英会話教室と小学校が多かった。専攻ごとにみると〈日〉は1位が小学校、1人差で2位が学習塾、3位が英会話教室となっていた。一方〈英〉は1位が英会話教室、2位が小学校、〈キャ〉は英会話教室と海外生活、小学校が同数だった。さらに詳しく見ると、〈英〉は3歳で英会話教室に通っていたり、小学校入学前、小学校低学年から英語学習を開始している人が多く、〈日〉に比べて開始時期は早い傾向に加え、英会話教室での会話中心の学習が多かった。言い換えると、〈英〉のほうが英語学習を早く開始し、コミュニケーションを学んでいたようである。

表 1 中学校入学以前の主な英語取組内容：専攻別（人数）

学習場所	日文	英文	キャリア
英会話教室	10	17	1
学習塾	13	4	0
家	4	2	0
海外生活	1	3	1
小学校	14	10	1
幼稚園	3	0	0
その他	0	0	0

Q5では「一日の平均英語学習時間」を聞いた。結果は表2の通りである。1時間から2時間未満が最も多く、専攻間の学習時間数に大差は見られないが、〈日〉のみ3時間以上の回答があり、3時間が2人、12時間が1人だった。12時間の人は、0～2歳の間カナダで海外生活を経験していた。Q6「英語に触れ始めたきっかけ」では〈日〉、〈英〉、〈キャ〉共に、親の勧めと回答した人が一番多かった。〈英〉は自分からの回答が23%で、〈日〉の13%や〈キャ〉の0%に比べて自発的に始めた人が多かった。一方で、その他として、「小学校で授業があったから」や「特に意識していない」という回答も見られた。

表 2 一日の平均英語学習時間：専攻別（人数）

時間	日文	英文	キャリア
1時間未満	11	8	1
1時間～2時間未満	16	20	2
2時間～3時間未満	4	4	2
それ以上	3	0	0

5.2. 中学校入学前と入学以降の現在の動機づけ

まず現在の動機づけについて中学校入学前に英語学習を開始した人と中学校入学以降に英語学習を開始した人を比較する。現在の動機づけを測る質問は全部で5項目ある。Q30-1「現在、必修英語科目以外の学校における英語学習状況」では、〈必修のみ〉が〈以前〉と〈以降〉が同率で62%、必修以外の英語学習取り組みをもつ人のうち〈必修以外

の英語科目)の回答が、〈以前〉は30%、〈以降〉は13%と差が見られた。〈キャリア利用・キャリア課程生〉の回答者は〈以前〉のほうが〈以降〉より多くなると予想したが、人数差は2人にとどまった。Q31-1「授業以外での英語活動状況」では、〈学校以外で英語学習をしている人〉が〈以前〉は58%、〈以降〉は54%となり大差はなかった。しかし、学校以外の英語学習内容の内訳は〈以前〉のみ〈英会話教室〉、〈サークル活動〉の回答者がおり、〈以降〉の主な回答は〈自主学习〉や〈洋楽鑑賞〉だった。〈以前〉のみに見られた〈英会話教室〉、〈サークル活動〉における英語の取り組みは、他項目と比べ自発性が高く、高い動機づけを持っていると考えられる。Q32「英語学習は生きていくうえで必要か」において、「とても思う・少し思う」の回答は〈以前〉は93%、〈以降〉は80%と全体的にプラスの傾向だった。〈以前〉は「とても思う」が54%、〈以降〉は「少し思う」が47%で最頻値に違いがあった。この結果から、英語学習の必要性については〈以前〉のほうがより強い意識を持っていると言える。

Q38の「高校時代と比べた現在の英語学習に対する意欲の高まり」では〈以前〉と〈以降〉で共通点が2点あった。1点目は、〈以前〉と〈以降〉どちらも「少し高まった」が最頻値となり、それぞれ39%、47%となった。2点目は、〈以前〉と〈以降〉に共通して「低くなった」の回答が10%見られた。相違点として、〈以降〉は「高まった」の回答が無く、半数以上が「少し低くなった・低くなった」のマイナス傾向であったが、一方〈以前〉は半数以上の55%が「少し高まった・高まった」と回答し、プラス傾向であり、両者で反対の結果を示した。中学校や高校の教育と異なり、大学では英語に触れる時間や強制力が少なくなるため、英語学習は自発的な活動に限られてしまう。したがって、英語に強い興味関心を持った人以外は、英語の学習意欲が停滞もしくは低下する傾向にあると考えられる。Q40「今後英語学習を続けようと思うか」について〈以前〉は「少し思う」が47%、〈以降〉は「あまり思わない」が53%で最頻値が異なった。〈以前〉は「とても思う・少し思う」、「あまり思わない・全く思わない」がちょうど50%で半数に分かれた。一方、〈以降〉は「全く思わない・あまり思わない」で73%とマイナス傾向を示し、将来に向けた学習を行う統合的動機づけをもった人は少なく、全体として〈以前〉のほうが将来への継続的な学習意欲があると考えられる。当初、Q32「英語学習することは生きていくうえで必要だと思いますか」とQ40「今後英語学習を続けようと思うか」の質問に関係性があると予想し、Q32の必要性に強く反応した人はQ40の今後の学習意欲にも強い反応があると考えたが、結果は異なり、必要性に関しては、プラスが〈以前〉は93%、〈以降〉は80%で共に必要性を高く感じているようだが、今後の学習意欲では、

〈以前〉が87%もあったが〈以降〉が27%しかなく、差が生じた。〈以前〉において英語学習の必要性和今後の意欲には関係がある一方、〈以降〉は英語学習の必要性は感じているが、今後の継続的な学習意欲は低く、両者の関連は低いようである。

5.3. 中学校入学前に英語学習開始した人の現在の動機づけ〈専攻比較〉

中学校入学前に英語学習を始めた人を専攻ごとに分け(〈日〉45人、〈英〉36人、〈キャ〉5人)、分析を行った。Q30-1「現在、必修英語科目以外に学校での英語学習状況」は〈日〉の95%が〈必修の英語科目〉のみとなり、圧倒的に他専攻より英語に触れる時間は少ない。〈英〉は6割が必修科目に追加して英語を学んでいたが、〈キャリア課程や利用〉は無かった。〈英〉は〈日〉と比べて学校での英語学習時間が多いことも分かった。Q31-1「学校以外での英語学習状況」では、〈日〉が7割、〈英〉は3割が〈何も触れていない〉の回答だった。前述 Q30-1と Q31-1の結果から、〈日〉の7割、〈英〉の3割は学校の必修英語の授業のみが現在の英語に触れる時間だといえる。〈日〉の学校以外で触れている人のうち67%は洋楽鑑賞、33%が自主学習、〈英〉は62%が洋楽鑑賞、28%が自主学習であった。〈英〉は英会話教室やサークル活動の回答もあるため、自発性も動機づけも高いようである。また、自主学習の内容を答える回答では、〈日〉は課題や TOEFL の勉強、〈英〉は TOEIC、TOEFL、英検の勉強や予習復習、〈キャ〉は文法の勉強と回答に違いが出た。Q32「英語学習することは生きていくうえで必要だと思いますか」では全体として「とても思う・少し思う」が多く、〈日〉のみに「全く思わない・あまり思わない」の回答があった。〈日〉は「少し思う」が最頻値、〈英〉と〈キャ〉は「とても思う」が最頻値となり、〈以前〉の中でも特に、〈英〉と〈キャ〉は英語学習の高い必要性を感じていた。Q38の「高校時代と比べて現在の英語学習に対する意欲の高まり」では、〈日〉のみマイナス傾向の「低くなった・少し低くなった」が67%だった。以上から〈日〉は英語学習に対する意欲が下降傾向、〈英〉は上昇傾向だということがわかる。〈英〉〈キャ〉はもともと英語に関心があり、大学で学びたいことが出来るので上昇傾向にある一方、〈日〉は Q30-1「現在の必修英語科目以外の学校における英語学習」と Q31-1「授業以外での英語活動状況」の結果から、英語に触れる時間も高校と比べて減少しているので意欲も下降傾向と考えられる。Q40「今後英語を学習し続けようと思いますか」に関して、〈英〉〈キャ〉は「全く思わない」の回答者がいなかった。〈日〉は「少し思う」が最頻値、〈英〉〈キャ〉は「とても思う」が最頻値と段階違いとなった。以上から、将来の学習意欲については全体的にプラスだが、〈日〉は〈英〉〈キャ〉と比べると将来の英語

学習意欲は低く、継続的な学習意欲も低かった。一方、〈英〉〈キャ〉は現在の動機づけだけでなく、将来への動機づけも高くなっていることがわかった。3つの専攻の中での英語に対する学習意欲は〈キャ〉が最も高く、次に〈英〉、〈日〉であることが明らかになった。

5.4. 中学校入学前と入学以降の現在の英語能力比較

現在の英語能力を測る項目は全部で6項目ある。Q33～36では英語の4技能（話す、読む、聞く、書く）について実用英語技能検定準1級の英検 Can-do リストを用いて質問し、能力を測った。4技能に共通して、〈以前〉は〈以降〉より能力が高かった。また、「できる」の回答は〈以前〉のみに見られた。Q33「社会性の高い話題について説明、自分の意見を述べられると思うか」の「話す能力」では〈以前〉は「全くできない」が27%、「あまりできない」が61%、〈以降〉は「全くできない」が27%、「あまりできない」が67%だった。〈以前〉〈以降〉共に「あまりできない」が最頻値となり、どちらもマイナス傾向だった。また、〈以前〉は〈以降〉より高い能力を示したが大差はなかった。さらに、回答者の多くが準1級に達していないと見られた。Q34「社会性の高い分野の文章を英語で読んで理解できる」の「読む能力」は「少しできる」が〈以前〉は51%、〈以降〉は47%で最頻値だった。「できる」の回答は〈以前〉のみだった。以上から「読む能力」に関して英検準1級に達している人は共に少ない結果だが、〈以前〉も〈以降〉も全体的に読む能力は高かった。〈以前〉と〈以降〉では若干〈以前〉の能力が高いと思われる。

Q35「社会性の高い内容を英語で聞いて理解できるか」の「聞く能力」では1点目「あまりできない」が〈以前〉は57%、〈以降〉は67%で最頻値となった。2点目「全くできない」と「あまりできない」のマイナス傾向が、〈以前〉は70%、〈以降〉は80%と差が生じた。「全くできない」の回答者は〈以前〉〈以降〉ともに13%となり「あまりできない」の割合が多かった。1点目と2点目から現在の「聞く能力」に関して、〈以前〉と〈以降〉は共にマイナス傾向が強く、聞く能力が高いとは言えない。しかし、「全くできない」が最頻値ではないため、「聞く能力」が最も低いとも言い切れない。3点目に先行研究の恵・横川・三浦（1996）、高橋・大野・柳（2016）、JASTEC プロジェクトチーム（1988）から早期英語教育はリスニング能力を高めることがわかっており、〈以前〉はプラス回答が多くなると予想していたが、プラス回答は30%にとどまった。特別高い能力を身につけるとは言えないが、〈以降〉と比べると能力は高く、幼少期の英語学習は聞く能力に影響をもたらすと言えるようである。Q36「日常生活の話題や社会性のある話題について

まとまりのある文書を書く」の「書く能力」では「あまりできない」が〈以前〉は42%、〈以降〉は67%で最大値となりマイナス傾向となった。「できる・少しできる」のプラス回答は〈以前〉が42%、〈以降〉が6%と大きく差が生じた。以上から、〈以前〉は〈以降〉より能力が高いが、共にマイナス傾向が強く英検準一級には大半が達していない。

Q37「英語は得意ですか、苦手ですか」では〈以前〉は「少し得意」が34%、〈以降〉は「少し苦手」が40%で最大値となった。〈以降〉は「得意」と回答した人がいなかった。〈以前〉は「得意」と「少し得意」が半数を超えると予想していたが、「得意」と「少し得意」で43%にとどまり〈以降〉は27%だった。この結果は上記で述べた4技能の自己評価結果（Q33-36）と英語全般として得意不得意を示した自己評価（Q37）はある程度一致した。英語の4技能（話す、聞く、読む、書く）について自己評価として「できる」「できない」を回答してもらったが、すべての結果において回答は〈以前〉が〈以降〉よりも英語の能力が高かった。「得意」「不得意」の回答においても〈以前〉が「得意」の回答者が多く自己評価は高かった。以上より、〈以前〉のほうが英語能力に関して自信があると言えるだろう。

上記の「話す、読む、聞く、書く」の4技能のアンケート結果を以下の図2と図3にまとめると、4技能は〈以前〉〈以降〉ともに準一級には達していないことが判明した。4技能の中で能力別に順位をつけるとすると2つの見方がある。まず、〈以前〉の「できる」と回答した人だけで見ると、書く能力が最も高く、それに読む能力、聞く能力と続き、話す能力が最も低いことがわかる。次に、「できる・少しできる」を合わせてプラス回答の合計として4技能の中でどの能力が最も優れているかを見ると、「書く」と「読む」の順位が入れ替わり、「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」の順となる。つまり、書く能力は自信をもって「できる」と答える人が多く、読む能力は「少しできる」の回答が多い。一方、〈以降〉は4技能すべてにおいて「できる」と回答した人はいなかった。4技能の中で能力が高い順に順位づけすると、読む能力が最も高く、それに続き、書く能力、聞く能力、話す能力の順となった。書く能力の「できる・少しできる」は〈以前〉〈以降〉で15%の差があるが他の技能では10%以内の差にとどまっている。以上から、書く能力は中学校以前の英語学習で効果が出やすいと言える。

Q39「高校時代と比べて英語力は伸びたと感じるか」では、〈以前〉は「感じない」が55%、〈以降〉は「少し感じる」が60%となった。予想と異なり、〈以降〉のほうが能力の伸びを実感していた。しかし「とても感じる」は〈以前〉のみの回答となった。Q41「現在の取得資格」について取得ありが〈以前〉は84%、〈以降〉は33%となった。比較

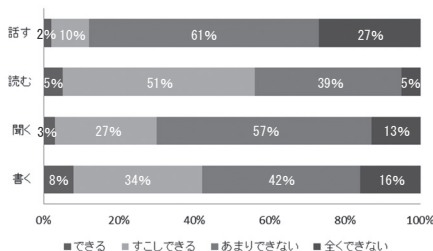


図 2 〈以前〉 4 技能能力

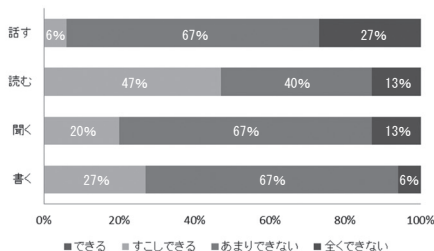


図 3 〈以降〉 4 技能能力

してみると圧倒的に〈以前〉が多い。資格には TOEIC、英検が挙げられた。レベルを比較するため、「英語 4 技能試験サイトの資格・検定試験 CEFR の対照表」を用いて全て TOEIC の得点に置き換えた。以下は学校段階別の能力分布表である。

CEFR のレベル指標は以下である。A1～C2 の 6 段階にレベル分けされ、A は基礎段階の言語使用者、B は自立した言語使用者、C は熟練した言語使用者となっている。A1 は「よく使われる日常的表現と基本的言い回しを理解、使用できる。自分、他人の紹介できる。」、A2 は「基本的な個人情報や、自身に関係のある領域について、分野表現の理解できる。」、B1 は「仕事、学校など普段出会う身近な話題を標準的な話し方なら理解できる。筋の通った文章を作れる。」、B2 は「自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的、具体的内容でも主要な内容を理解できる幅広い話題について明確で詳細な文章を

表 3 CEFR の対照表 〈中学校〉

CEFR	TOEIC	日文	英文	キャリア	以前	以降
A1	120～224	15	9	1	25	4
A2	225～549	9	13	1	23	3
B1	550～784	1	1	1	3	0
B2	785～944	0	0	0	0	0

表 4 CEFR 対照表 〈高校〉

CEFR	TOEIC	日文	英文	キャリア	以前	以降
A1	120～224	8	1	1	10	3
A2	225～549	11	13	0	24	4
B1	550～784	8	9	2	19	2
B2	785～944	0	0	1	1	0

表 5 CEFR の対照表 〈現在〉

CEFR	TOEIC	日文	英文	キャリア	以前	以降
A1	120～224	7	2	0	9	3
A2	225～549	15	13	0	28	3
B1	550～784	11	9	2	22	3
B2	785～944	0	0	3	3	0

作れる。」とそれぞれ位置付けている（英語 4 技能試験情報サイト）。アンケートを分析した結果、C 段階に分類されたものはなく結果としては A と B 段階のみになった。

現在の表（表 5）を見ると〈以前〉は A2 が 53%、〈以降〉は A1、A2、B1 がそれぞれ約 30% と最頻値となっており、〈以前〉は基礎段階から低レベルの自立した言語学習使用者レベル、〈以降〉は基礎段階の言語使用者レベルが多いと分かった。つまり、中学校入学以前に英語学習を始めた方が現在の能力が高いと言える。

5.5. 中学校入学前に英語学習開始した人の現在の英語能力〈専攻比較〉

中学校入学前に英語学習を始めた人を専攻ごとに分け（〈日〉45 人、〈英〉36 人、〈キャ〉5 人）、分析を行った。Q33「社会性の高い話題について英語で話す」「話す能力」は、〈日〉〈英〉の傾向が似ていたが、〈英〉のほうが能力は高かった。共通して「できる」の回答はなく、「あまりできない」が〈日〉は 56%、〈英〉は 74% だった。「全くできない・あまりできない」は〈日〉が 96%、〈英〉が 88% とマイナス傾向だった。一方〈キャ〉は「できる・少しできる」の回答で 80% と強いプラス傾向を示し、「全くできない」の回答がなかった。〈日〉と〈英〉は Q33 の自己評価でも、CEFR の対照表でも英検準一級に達している人はいなかった。「全くできない」が〈日〉40%、〈英〉15% で両者の能力差は明らかだった。

Q34「社会性の高い分野の文章を英語で読んで理解できる」の回答から分かる「読む能力」について〈日〉は「あまりできない」が 47%、〈英〉は「少しできる」が 61% と最頻値になった。〈キャ〉の回答は「できる」と「少しできる」のプラス回答しかなく、読む能力は非常に高いと言える。したがって、読む能力では〈日〉がマイナス傾向、〈英〉〈キャ〉はプラスに優勢といった差が見られた。Q35「社会性の高い分野の文章を英語で聞いて理解できる」の回答から分かる「聞く能力」では「あまりできない」が〈日〉は 56%、〈英〉は 67% と最頻値になった。「全くできない」に関しては〈日〉が 22%、〈英〉が 3% となり、〈日〉はマイナス傾向が強く、〈英〉は〈日〉ほどのマイナス傾向を示さ

なかった。〈キャ〉は「できる・少しできる」で100%の回答となり、読む能力同様に非常に高い聞く能力を持っている。〈日〉と〈英〉は日常的に60%を超える割合で洋楽鑑賞をしているが、社会性の高い内容を聞く能力に関しては影響があまり見られなかった。Q36「日常生活の話題や社会性のある話題についてまとまりのある文章を英語で書く」「書く能力」では〈日〉は「あまりできない」が51%、〈英〉は「少しできる」が44%で最頻値だった。〈日〉は「全くできない・あまりできない」で73%、一方〈英〉は「できる・すこしできる」で55%となりプラスが優勢という差が生じた。〈キャ〉は「できる・少しできる」で100%となり、書く能力は非常に高かった。Q37「英語は得意か苦手か」では、〈日〉は「苦手・少し苦手」で77%、中でも「苦手」が45%を占め最頻値だった。〈英〉は「少し得意」が47%で多く、「得意」と合わせて61%とプラスが優勢である。〈キャ〉は「得意」が60%、「少し得意」が40%でプラス傾向となった。以上の結果から、英語能力の自信は〈日〉と〈英〉の間でも大きな差があると分かった。Q39「高校時代と比べて英語力は伸びたか」の質問では〈日〉は「感じない」が68%、〈英〉は「感じない」と「少し感じる」が同率で42%となった。〈キャ〉は「とても感じる」が60%で最大値となった。4技能の結果はプラスの傾向を示した〈キャ〉もQ39では「感じない」のマイナス回答が見られた。全体として大学では英語能力を測る機会が少ないため、英語力の伸びを感じにくいのでは思われる。Q40「現在の資格取得状況」でレベルの分布を見ると、〈日〉はA1、〈英〉はB1、〈キャ〉はB2がそれぞれ最も多く、レベルは上から〈キャ〉〈英〉〈日〉の順で一段階ずつ差があり、専攻による違いが大きいことから、中学校入学前に英語学習を開始した人の中でも、その後の学習状況によって動機づけや英語能力に与える影響は異なると推測される（表5）。

5.6. 中学校入学前に英語学習を始めた人と入学以降に始めた人での動機づけの変化

動機づけの変化を調べるため、アンケートにおいて、中学校の頃の項目、高校の頃の項目、現在の項目、それぞれに同じ質問をした。質問は大きく分けて学習の楽しさ、学習意欲、学習の目的、学習の手段の4項目とした。

Q7とQ18ではそれぞれ中学、高校の時「英語学習は楽しかったか」について質問した。〈以前〉〈以降〉共に全体的に高校よりも中学校での英語学習が楽しいとする傾向がみられ、〈以降〉は〈以前〉よりも英語学習を楽しみと感じたという結果だった。マイナスの「全く楽しくなかった・あまり楽しくなかった」の割合に注目すると、〈以前〉と〈以降〉に中学校において差が無いが、一方で、高校では〈以前〉は「全く楽しくなかった・あ

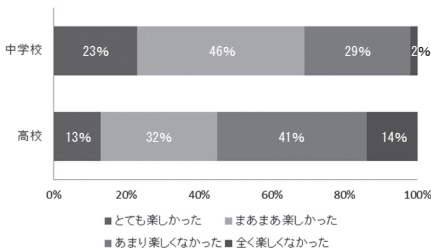


図4 〈以前〉英語学習の楽しさ

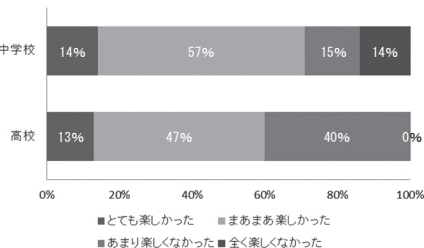


図5 〈以降〉英語学習の楽しさ

「あまり楽しくなかった」がどちらも増加し、全体の55%がマイナスを占めた。〈以降〉は「全く楽しくなかった」がなくなり、「あまり楽しくなかった」は増加して40%となった。中学校のほう高校より英語学習を楽しみと感じていたが、〈以前〉と〈以降〉では〈以降〉の方がプラスが多くなった。Q32「英語を学習することは生きていくうえで必要か」では〈以前〉は「とても思う」が54%、〈以降〉は「あまり思わない」が47%で最頻値となった。〈以前〉は「とても思う・少し思う」プラスで93%、〈以降〉は「全く思わない・あまり思わない」が81%と反対の結果になった。上記 Q7と Q18の「英語学習は楽しかったか」を変化として見ると、楽しさと必要性は関係ないように思われるが、必要性に関しては、英語学習を始めた時期が早い人のほうが、学習の必要性をより強く感じる結果となった。

Q9-1と Q20-1、Q30-1、Q31-1では「学校の授業以外での英語学習状況」について、中学校の頃、高校の頃、大学のそれぞれの学校段階の状況を質問し回答してもらい、図6と図7が〈以前〉と〈以降〉の結果である。〈以前〉は中学校、高校、大学の中で、中学校が授業以外の英語学習がもっとも多い結果となったが、高校、大学と学校段階が上がるごとに学校の授業以外の英語学習が減っている。一方、〈以降〉は大学時の英語学習がどの学校段階よりも多い結果となった。〈以降〉は大学を除くと中学校が多く、中学校と高校では高校時の英語学習が減っており、この結果は〈以前〉の中学校と高校の英語学習減少傾向と同様である。予想としては、中学、高校までは学年が上がるごとに勉強内容も難しくなるため、高校で塾など学校以外での学習が増えるためだと考えた。しかし、中学校のほうが学校以外の学習が多い結果となった。内訳をみると中学校では、〈以前〉学習塾43人、英会話教室10人、その他が1人、高校は学習塾24人、予備校17人、英会話教室5人、海外留学1人、大学では、自主学習が17人、英会話教室が1人、サークルが2人、洋楽を聞くが32人だった。結果として学校段階の違いによる大きな差はなかった。

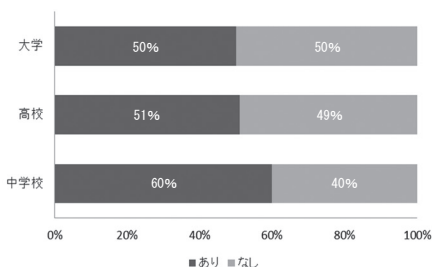


図6 〈以前〉学校以外の英語学習変化

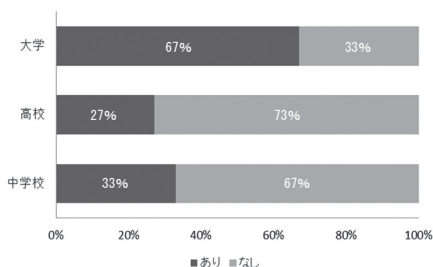


図7 〈以降〉学校以外の英語学習変化

中学校で英会話教室が多いのは、中学校入学前から継続している人の結果と考えられる。高校では学習塾と予備校が大半を占めており、受験を意識した学習をする人が多いとみられる。Q31-1「授業以外での英語学習」では、〈以前〉のみ、サークルと英会話教室があり、この2つは自発性も高いため、動機づけの質は〈以前〉のほうが高いといえる。

Q8とQ19で「中学と高校でそれぞれ英語を学ぶ目的」について聞いた。図8と図9にみられるように、中学校でテストと回答した回答者が〈以前〉は77%、〈以降〉は87%で最頻値になった。続いて、受験が〈以前〉は64%、〈以降〉は67%と結果が似ている。〈以前〉には就職、海外留学を目的としている人がいるため、〈以降〉に比べて動機づけは高いとみられる。高校で受験を目的とする人が〈以前〉〈以降〉ともに増加した。また、〈以前〉は海外留学も増加した。さらに〈以前〉〈以降〉ともに就職を目的とする人はいなくなった。一般的にテストや受験を目的とする動機づけは道具的動機づけと位置づけられ、海外留学や就職を目的とするものは統合的動機づけと位置づけられる。〈以前〉の方が、海外留学や就職などの回答者が多いことから、統合的動機づけを持っている人が多い。

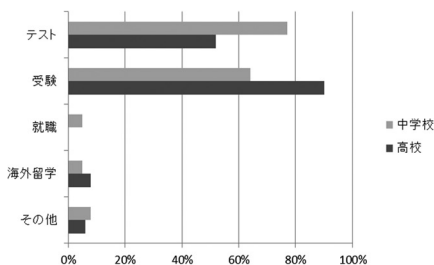


図8 〈以前〉英語学習の目的

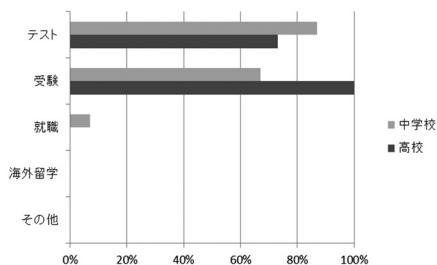


図9 〈以降〉英語学習の目的

いといえる。したがって、中学校、高校、大学どの学校段階でも英語学習の目的は〈以前〉が高く、統合的動機づけを持っているといえる。

Q27と Q38ではそれぞれ「高校、大学の時期に英語の学習に対する意欲は高まったか」について質問した（図1 および図2 参照）。Q27「高校の時、中学の頃と比べての英語学習意欲の高まり」では、〈以前〉は「少し高まった」が31%、〈以降〉は「高まった」が40%で最頻値となった。〈以前〉の方が高い段階の回答が多くなると予想したが、結果は逆になった。「高まった・少し高まった」を合わせると〈以前〉は60%、〈以降〉は67%となった。Q38「高校時と現在の英語学習に対する意欲」では、〈以前〉は「少し高まった」が39%、〈以降〉は「少し低くなった」が47%で最頻値となった。Q27の結果とは異なり、〈以降〉はマイナス傾向が増加した。〈以前〉は、「高まった」が減少、「少し高まった」が増加、最頻値が「高まった」から「少し高まった」に1段階下がった。〈以前〉は現在、〈以降〉は高校時に特に英語学習に対する意欲が高まった。一般的に大学と比べて高校での英語学習のほうが、授業や課題などで英語学習時間が多く、テストや受験など緊張感も高いと言える。

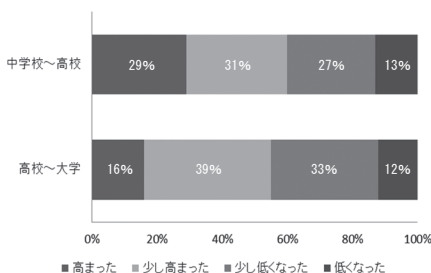


図10 〈以前〉の意欲の高まり変化

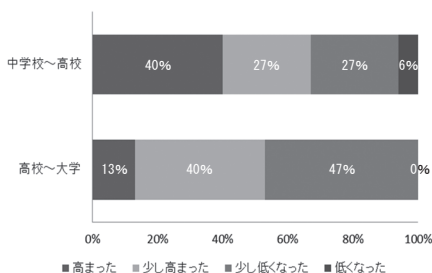


図11 〈以降〉の意欲高まり変化

Q40「今後英語を学習し続けようと思いますか」では〈以前〉は「とても思う」が47%、〈以降〉は「少し思う」が53%で最頻値となった。「とても思う・少し思う」が〈以前〉は87%、〈以降〉は73%で共通してプラス傾向となり、〈以前〉は〈以降〉より今後の学習意欲が高かった。

5.7. 中学校入学前に英語学習始めた人の動機づけ変化〈専攻比較〉

Q7と Q18では「英語学習が楽しかったか」を中学校の時、高校の時それぞれについて質問した。以下は中学校と高校での図である。

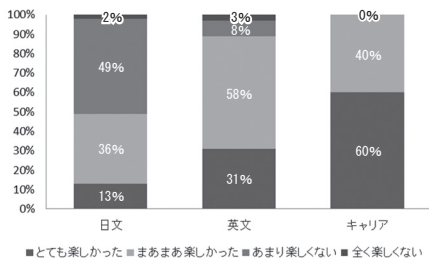


図12 中学校での英語学習楽しさ：専攻別

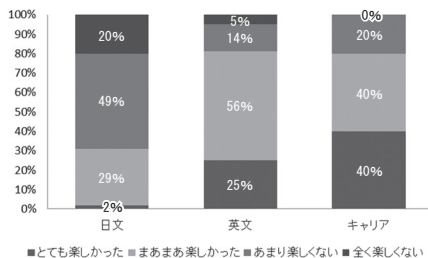


図13 高校での英語学習楽しさ：専攻別

全体的には高校より中学校で英語学習の楽しさを感じていた。中学校では〈日〉と〈英〉は「まあまあ楽しかった」が最頻値、〈キャ〉は「とても楽しかった」が最頻値となった。中学校から高校になると、プラス回答の人数が〈日〉は18%（8人）、〈英〉は8%（3人）、〈キャ〉は20%（1人）減少した。〈日〉は高校で楽しさが下がった人が多く、また他専攻よりプラスが少ない。

Q9-1とQ20-1とQ30-1とQ31-1では中学校、高校、現在まで「学校以外の英語学習」について質問した。中学校から現在にかけて学校段階が進むにつれ、〈日〉は学校以外の英語学習は減少している。〈英〉は高校で少し減少するが、現在で回復し中学校と同率となっている。〈キャ〉は学校段階が進むごとに学校以外に英語学習をする人が増えた。

〈キャ〉は中学校で学校以外の英語学習が他専攻と比べ最も少なかったが、高校以降は1番多くなった。つまり〈キャ〉の動機づけは伸び続けているといえる。内訳は中学において大差はなかったが、高校になると、〈英〉のみ英会話教室、海外留学をしていた人の回答があり、大学でも〈英〉のみが、英会話教室、サークル活動の回答があったり、〈英〉に英語に強い関心を持っている人がいると言える。

Q8とQ19では「英語学習の目的」について、中学校と高校それぞれを質問した。テスト、受験、就職、海外留学、その他の項目の中、中学校では、〈キャ〉はテストと受験のみの回答であった。〈日〉と〈英〉は就職と海外留学の回答が若干名あり、割合としては〈英〉が最も多かった。また、その他の回答において、〈日〉は授業としてあったから、〈英〉は英語が好きだったから、周りとの差をつけたかったから等、〈英〉は〈日〉よりも英語への関心が高いと思われる回答だった。高校では、中学校と比べ受験を目的にする人が全体的に増加した。特に差が開いたのは就職、海外留学、その他の項目であり、〈英〉が全てにおいて増加した。海外留学については、高校で中学校の数の倍になった

ことから英語学習に関して短期的ではなく、長期的な学習意欲を持っている人が増加したと言える。〈英〉は他専攻と比べて統合的な動機づけを持っていると言える。

Q27と Q38では「英語に対する意欲の高まり」を、中学校から高校、高校から大学での変化についてそれぞれ質問した。中学校から高校での意欲の変化(図14)は、〈日〉は「少し高まった」、〈英〉と〈キャ〉は「高まった」が最頻値となった。〈日〉は「低くなった・少し低くなった」で45%を占めている。〈キャ〉は「高まった」と「少し低くなった」でちょうど半分に分かれる結果となった。英語学習の意欲の変化について、中学校から高校、高校から大学にどちらにおいても全ての専攻でプラスが優勢となった。しかし、高校から現在の意欲(図15)には変化があり、〈日〉は「少し低くなった」、〈英〉は「少し高まった」、〈キャ〉は「高まった」が最頻値となり、〈日〉〈英〉は高校時と比べて一段階ずつ低下した。〈キャ〉は最大値に変化はないが、中学校から高校で「少し低くなった」のマイナス回答した人全員が「少し高まった」になり上昇傾向になった。また、英語学習の目的となる受験をきっかけに意欲はどう変化したかを、グラフに記入してもらい分析した結果は表6である。〈日〉は減少傾向が強く、〈英〉〈キャ〉は上昇傾向が強いことがわかった。以上から〈日〉は道具的動機づけ、〈英〉〈キャ〉は統合的動機づけを持っていると考

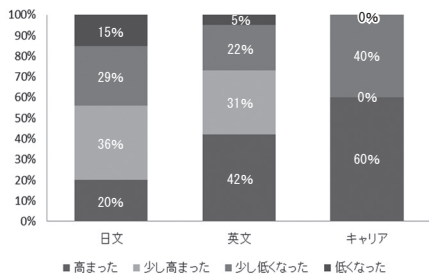


図14 中学校から高校への意欲変化：専攻別

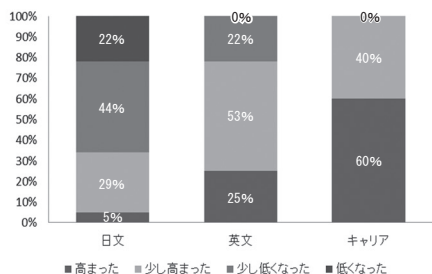


図15 高校から現在への意欲変化：専攻別

表6 高校受験、大学受験をきっかけとした意欲の変化

受験	日文	英文	キャリア
上がった	14	23	3
下がった	27	14	0
平行	4	2	0

えられる。

Q32「英語学習の必要性」については、図16のように〈英〉と〈キャ〉はプラスの回答のみ、〈日〉のみ13%がマイナスの回答であった。最頻値は〈日〉で「少し思う」が51%、〈英〉と〈キャ〉は「とても思う」で74%と80%となり、英語に関して高い関心と重要性を感じていると言える。〈日〉と〈英〉〈キャ〉間で大差が見られた。

上記の必要性和関連して Q40で「今後英語を学習し続けようと思うか」を質問した(図17)。〈日〉のみ「全く思わない」の回答があり(6%)、「とても思う」は〈英〉は75%、〈キャ〉が100%で最頻値となった。〈英〉と〈キャ〉は、先述の Q32「英語学習の必要性」の結果と傾向が似ていた。違いとしては〈日〉の「とても思う・少し思う」の回答が減少、〈キャ〉は Q32「必要性」については「少し思う」と「とても思う」の回答があったが、Q40の「今後英語を学習し続けようと思うか」においては全員が「とても思う」を回答していた。以上から〈日〉は英語学習の必要性は感じていても今後の学習意欲は高まらず、一方〈英〉〈キャ〉については英語学習の必要性を強く感じ、今後も学習し続ける意志を示し、強い学習意欲を示していた。以上から、英語学習の必要性和今後の学習意欲の回答への関連性は〈日〉は弱く、〈英〉〈キャ〉は強いと言える。

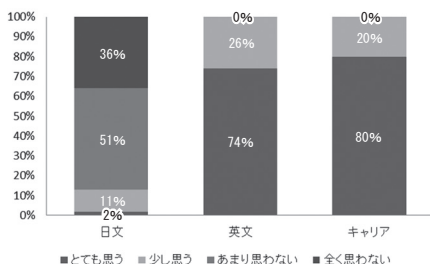


図16 英語学習の必要性：専攻別

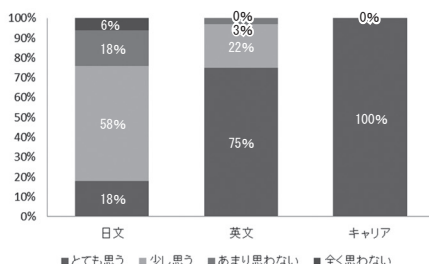


図17 今後の学習意欲：専攻別

5.8. 中学校入学前に英語学習を始めた人と以降に始めた人の英語能力の比較

Q11、Q22、Q35は学校段階別の「聞く能力」についての質問である(図18および図19)。1点目に「できる・少しできる」は中学校において〈以前〉と〈以降〉共に約80%、高校で〈以前〉80%〈以降〉60%、大学で〈以前〉30%〈以降〉20%となり、中学校以前の英語学習は高校以降の聞く能力を高めており、良い影響を与えることが分かった。2点目として、図18を見ると、中学校から高校にかけての〈以前〉の聞く能力は上がって

いと分かる。プラスの割合は増えているが、中学校と比べて「できる」が減り「少しできる」が増加している。この結果から、英語能力は伸びていると言えるが、「できる」と答えるほど自信を持った人はいないため、おおいに伸びたとはいいいがたい。〈以前〉は〈以降〉より能力が高いことが分かった。

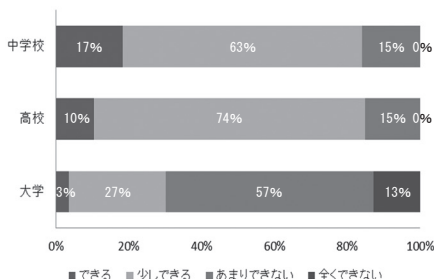


図18 〈以前〉の聞く能力：学校段階別

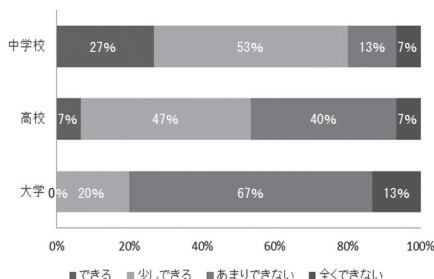


図19 〈以降〉の聞く能力：学校段階別

Q12とQ23、Q34では学校別の「読む能力」に関しての質問をした(図20および図21)。全体として〈以前〉〈以降〉に大差は見られなかった。「できる・少しできる」のプラスは若干の差だったが、「できる」は中学校、高校、大学の全てにおいて〈以前〉が多かった。以上から、「読む能力」に関して中学校以前の英語学習経験は読む能力を高めると言える。しかし、他の技能と異なり、学習次第で身につけやすい技能だと言える。

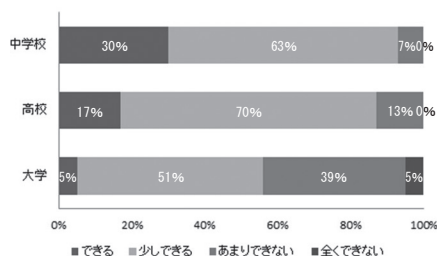


図20 〈以前〉の読む能力：学校段階別

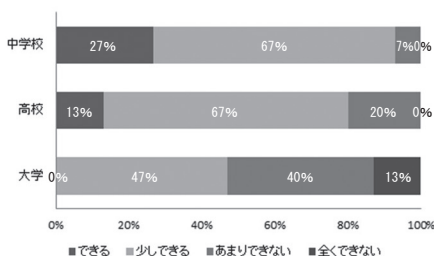


図21 〈以降〉の読む能力：学校段階別

Q13とQ24、Q33は「話す能力」についてである(図22および図23)。分かったこととして、〈以前〉と〈以降〉に共通して中学から高校にかけて能力が上昇していることが1点目にあげられる。2点目として〈以降〉にはすべての学校段階において「できる」の

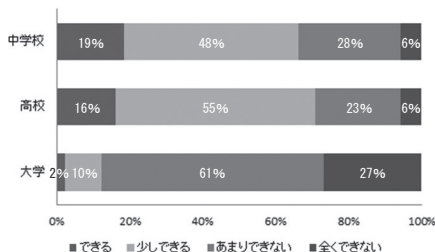


図22 〈以前〉の話す能力：学校段階別

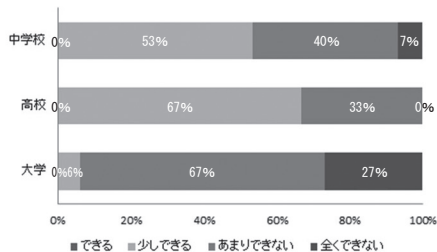


図23 〈以降〉の話す能力：学校段階別

回答がないため、プラスの割合は似ていても〈以前〉のほうが能力は高いといえることがわかった。

Q15とQ25、Q36は「書く能力」を聞いた(図24および図25)。1点目に中学校から現在にかけては〈以前〉〈以降〉は共に減少傾向を示していた。また、2点目は高校以降において〈以前〉と〈以降〉の差が特に大きくなった。3点目に能力としては〈以前〉が高いことがわかった。さらに4点目に〈以降〉の大学では「できる」の回答なかった。また、「全くできない」の回答は〈以前〉〈以降〉共に大学時のみとなった。以上から、〈以降〉は特に大学で能力は上がっていないようである。高校は大学受験を意識し、勉強量も増えるため、能力に関しても自信を持ちやすいが、大学入学後に能力を測る機会は減少するため、自信も持ちにくい状況にあるためだと考えられる。

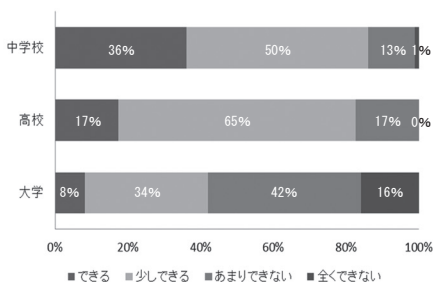


図24 〈以前〉の書く能力、学校段階変化

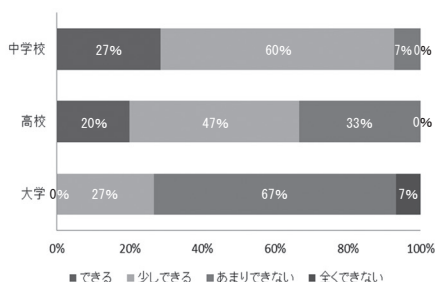


図25 〈以降〉の書く能力、学校段階変化

4技能を通して、大学の能力において変化が大きく見られた。結果として、中学校以前の英語学習はそれ以降の英語能力に少なくとも影響すると考えられる。以下、所属する専攻ごとに違いはあるのか分析する。

5.9. 中学校入学前に英語学習を始めた人と以降に始めた人の英語能力〈専攻比較〉

Q28とQ39では「中学校から高校、高校から大学にかけて英語力は伸びたか」について質問した。中学校から高校では〈英〉が「とても感じた」が90%、〈日〉と〈キャ〉では〈日〉のほうが伸びていた。高校から大学では〈キャ〉〈英〉〈日〉の順に英語能力が高まっている。高校時から大学時にかけて、〈日〉と〈英〉は英語力が下がり、〈キャ〉は上がっていたことが分かった。

以下、4技能を専攻別のグラフで比較する。

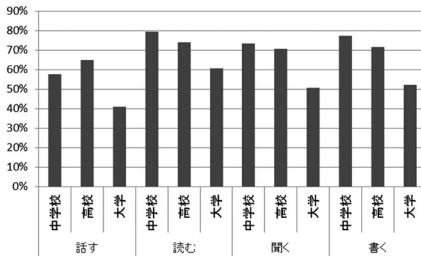


図26 〈日〉技能別学校段階の変化

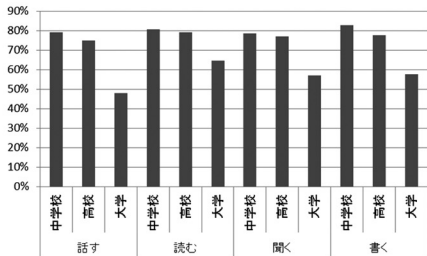


図27 〈英〉技能別学校段階の変化

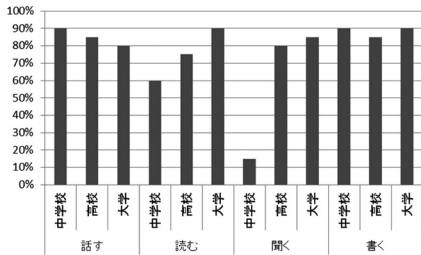


図28 〈キャ〉技能別学校段階の変化

1点目に図26、図27、図28を見ると、中学校から大学にかけての4技能変化では、〈キャ〉の話す能力を除いた技能において上昇傾向だった。2点目は〈日〉と〈英〉は中学校から大学にかけて、下がり傾向であると図26と図27から分かる。〈日〉と〈英〉で比較すると〈英〉のほうが能力は高く、〈日〉は高校の話す能力のみ上昇していることも読みとれる。〈日〉、〈英〉、〈キャ〉の大学軸をそれぞれ能力別に比べると4技能全てにおいて〈キャ〉が〈日〉と〈英〉よりも能力が高いことがわかる（図26、図27、図28）。

表 7 4 技能の専攻別、学校段階ごとの順位表

専攻	学校段階	1 位	2 位	3 位	4 位
日 文	中学校	読む	書く	聞く	話す
	高校				
	大学				
英 文	中学校	書く	読む	話す	聞く
	高校	読む	書く	聞く	話す
	大学	読む	書く	聞く	話す
キャリア	中学校	話す・書く		読む	聞く
	高校	話す・書く		聞く	読む
	大学	読む	書く	聞く	話す

学校段階別に 4 技能の中でどの技能の能力が最も高いかを示し、さらに専攻ごとに区切ることで専攻差がわかるように表 7 に示した。

〈日〉は中学校から大学まで順位変化はなかった。〈英〉は 1・2 位間、3・4 位間のみの変化で 1 位は「書く」、2 位は「読む」、3 位は「聞く」、4 位は「話す」となっている。上位 2 つ「書く・読む」の技能は実際に対面でコミュニケーションをとる際にはあまり役立たず、学校教育では十分に実用的な能力を養うことが難しい。一方、〈キャ〉は中学校と高校で「話す」と「書く」が 1 位と実用的な能力が〈日〉〈英〉と比べて身につけていると思われる。大学になると「読む・書く」が上位になり、実用的な英語能力の順位は下がった。「聞く・話す」能力を大学で養えていないともいえるが、中学校や高校で習ってきた会話と異なり、例えば法律や政治など専門用語が入り内容が難しくなったことからの結果ともとれるだろう。Q28 と Q39 で「中学校時代、高校時代と比べて英語力は伸びたと感じるか」についての質問し、それぞれ高校、大学について回答してもらった。結果は、〈日〉と〈英〉は、高校時のほうが能力の伸びを実感し、大学のほうが伸びを感じていない。〈日〉は「とても感じる・感じる」のプラスが 80% から 20% に減少、〈英〉は同じく 90% から 50% に減少した。一方、〈キャ〉は高校時よりも大学時のほうが英語能力の伸びを実感している。高校時と大学時どちらもプラスが 80% で同割合だが、「とても感じる」が高校時 20% から大学時 60% に増加した。能力の伸びを感じるかに関しては、テストなどそれを図る機会の有無も関係していると考えられる。また、学習の時間数、内容の難しさも関係していると考えられる。〈キャ〉は大学で英語を強化するプログラムの為、時間数も増え、内容も濃くなる。したがって、能力の伸びも実感できていると考えられる。

6. 考察

まず研究課題①「中学校入学前に英語に触れていた人と中学校入学以降に英語学習を開始した人の現在の動機づけと現在の能力はどのように関係するのか」について考察する。全体としては、中学校入学前に英語学習を開始した人と中学校以降に開始した人では、〈以前〉が動機づけ、英語能力ともに高いことが明らかになった。

まず、動機づけに関してであるが、中学校入学前の英語学習経験者は Q32「英語学習は生きていくうえで必要か」と Q40「今後英語を学習し続けようと思うか」の2つの質問において〈以前〉は必要性和今後の学習意欲どちらにもポジティブだった。一方、〈以降〉は必要性を高く感じている回答が多いが、今後の学習意欲への関心は低かった(80%→27%)。この結果から、〈以前〉は将来に向けての動機づけが強く統合的動機づけを持っていると考えられる。

JASTEC プロジェクトチーム(1994)が「早期英語学習は、学習者の現在の学習だけでなく、将来の英語および英語以外の外国語学習に対する学習意欲を高める役割を果たす」(p.42)と述べていることから、中学入学前の英語学習は、現在のみでなく将来への動機づけも高めるといえる。Q32と Q40は自己評価であり、実際の事実状況を示す質問 Q30-1「必修以外の英語科目履修状況」、Q31-1「授業以外の英語活動状況」、Q41「取得している資格」の結果からも〈以前〉については客観的に動機づけが高いと言えるだろう。Q41「取得資格」では、〈以前〉が84%、〈以降〉は67%の取得率となり差が生じていた。また、Q31-1「授業以外の英語活動状況」では、中学校入学以降に英語学習を開始した人と比べて割合に大差はなかったが、内訳で、自発性が伴われるサークル活動と英会話教室の回答は〈以前〉の〈英〉のみの回答だった。

喜田(2008)は「英語学習で積極的な多目的をもって学習しているグループは消極的単一目的のグループと比較して学力が有意に高い」(p.79)と結論付けている。大学において自発性が伴われるサークル活動や英会話教室を英語学習の手段としている事は、積極的な多目的ということが出来るだろう。アンケート調査で現在の英語学習の目的を直接的に聞いていないが、上記の結果から、中学校入学前に英語学習を開始した人は現在において客観的に見て動機づけが高いと考えられる。また、Q31-1「授業以外の英語活動」で積極的にサークル活動、英会話教室と回答した人は客観的に見ても動機づけが高いと考えられ、上記の喜田(2008)によると学力も高いと考えられる。

英語能力についても〈以前〉のほうが〈以降〉より高くなった。CEFRの対照表では〈以前〉のほうがB2に達している人がおり、〈以降〉と比べると高い上、〈以降〉は資格

取得さえしていないものの割合が〈以前〉よりも多かった。Q33～Q36で英語の4技能（読む、聞く、書く、話す）においても〈以前〉が〈以降〉を上回る結果となった。〈以前〉と〈以降〉では、ライティングは15%、リスニングは10%、リーディングは8%、スピーキングは6%、それぞれ〈以前〉が高い能力を示した。恵・横川・三浦（1996）、高橋・大野・柳（2016）、JASTEC プロジェクトチーム（1988b, p.54）の結果から、リスニング能力に関しては英語に触れる時期が早いほど現在の能力も高いと予測していた。結果としてリスニング能力において、中学校入学前の英語学習は能力を高めていた。これに関して、「開始時期の遅い早いリスニング、文法、語彙、リーディングのどの能力においても効果をもたらす結果を導くことはなかった。」（p.81）と述べたIwata（2012）の研究とは異なり、JASTEC プロジェクトチーム（1988）は、リスニング、リーディング、スピーキングに関して「長期的な視点から見れば非常に有効である」（p.54）と一致すると考えられる。しかし、本研究は4技能全てにおいて〈以前〉が有意となり、新たな発見となった。

また、CEFR 対照表から現在実際に英検準1級に達している人は、全体で〈キャリア〉の3名だったが、英検 Can-do リストを用いて能力を図った Q33～Q36 における回答とは必ずしも一致しなかった。回答した資格は取得時が不明のため、現在の英語能力であるとは言えないが、準1級に達している人は〈キャ〉のみで、専攻別での能力は、〈キャリア〉が最も高いと言える。上記で、高い動機づけを示した、〈以前〉の〈英〉に関しては準1級に達しているものはいなかったものの、〈キャ〉に続き、CEFR の表から英語能力が高かった。以上から、中学以前の英語学習は現在の英語能力を高め、その中でも現在英語と関係のある専攻に所属している人は英語能力がさらに高いといえる。

次に研究課題②「中学校入学前に英語に触れていた人と中学校入学以降に英語学習を開始した人の現在までの動機づけと能力はどう変化しているのか」を考察する。全体として、中学校から高校、大学と学年が進むにつれて動機づけは下がっていると分かった。Takagi（2003）は早期英語教育は中学校の英語学習に対する動機づけや態度に影響し、高校や大学には特に関係ないと述べていたが、本研究では、アンケートで動機づけを中学校から大学まで同じ質問項目で確かめることが出来なかったものの、中学入学前の英語学習経験者は大学で高い動機づけを示していた。

Q7の中学校時代とQ18の高校時代の「英語学習は楽しかったか」の結果については、全体として中学校から高校にかけて楽しさは下がっていた。〈以前〉と〈以降〉の比較では、中学校、高校に共通して〈以降〉の方が「楽しい」の回答が多かった。中学校では

プラスが2%の差で〈以降〉が上回り、高校では15%の差が開いた。また、Q27とQ38「中学校から高校、高校から現在にかけて英語学習に対する意欲は高まったか」では、高校時に〈以前〉〈以降〉に差はないが、現在の意欲では〈以前〉が優位となった。専攻別だと学校段階が上がるごとに〈英〉〈キャ〉は意欲が上昇し、〈日〉は下がった。

以上から、①〈以前〉は学校での内容は簡単に感じ、〈以降〉の人よりは楽しさを感じられなかった。②中学校以前の英語学習は特に現在の動機づけに影響はまた〈以前〉の中でも〈キャ〉や〈英〉は現在までの動機づけが高いことから、中学校入学以前の英語学習で英語に興味関心を持った人が現在、英語に関係する専攻に入学しているとも考えられる。動機づけの変化の一因と思われる受験で、〈英〉と〈キャ〉は英語学習に対する動機づけが上がり、〈日〉は下がった。必然的に英語学習に力を入れる受験勉強をきっかけとして、〈英〉と〈キャ〉は動機づけが上がっている。受験勉強の後も動機づけが継続していることは、受験が最終目標とはならず、今でも英語学習に興味関心があるととってよいだろう。したがって、中学校以前の英語学習は現在の動機づけに影響するといえる。

能力に関して、CEFRの対象表から、中学校から学校段階が上がるごとに能力の向上が見られた。〈以前〉は〈以降〉より能力が高く、4技能のグラフでは〈以前〉〈以降〉ともに中学校から現在にかけて学年が上がるごとに英語能力は減少しているように見える。しかし、英検 Can-do リストを用いて、アンケートの質問項目を中学校、高校、現在と級を上げて作成したため（中学校3級、高校2級、現在準1級）、全体としてどの時点で英語能力の細かい変動があるのかは読み取れなかった。したがって、〈以前〉〈以降〉の違い、専攻別の違いを考察する。

4技能のうち、英語でコミュニケーションをとる際、最も重要と思われる「聞く」「話す」能力において、どちらも中学校から現在どの段階においても〈以前〉が高い割合を示しており、中学校入学以前の英語学習がその後の能力に影響していると考えられる。特に「聞く」能力では〈以前〉だけが中学校以降に伸びを示している。恵ら（1996）の「リスニングの技能はいずれの学年においても Ex は Non-Ex より有意に優れていた。」（p.32）という研究結果と中学校、高校、現在におけるリスニング能力を〈以前〉と〈以降〉で比較した結果とも一致し、中学校以前の英語学習経験はリスニング能力を高めると考えられる。また、小学校の外国語活動が与える中学校の英語能力への影響を研究している高橋・大野・柳（2016）はリスニングとリーディング能力の比較で TOEFL Primary の結果から、リスニング能力のほうが有意に高い結果を見て、「小学校の外国語

活動で『音声中心』の学習を生徒らが体験してきたことが影響している」(p.139)と述べている。

以上から、中学校以前に英語学習を始め音声中心の学習をすることが、それ以降（大学）までの聞く能力を高めると考えられる。一方、高橋・大野・柳（2016）のリーディングとリスニング能力の比較では「リスニング能力の得点が有意に高い」と報告していたが、〈日〉〈英〉〈キャ〉のどの専攻・学校段階においてもリスニング能力よりリーディング能力が高かった（表7）。〈以前〉〈以降〉共に全ての学校段階でリーディング能力のほうが高く異なる結果となった。リーディングに学習開始時期は関係なく、学校教育で読む能力は身につく、伸びやすい技能だと言える。「話す」能力は特に中学校の能力において〈以前〉が10%以上高く、高校からの能力に〈以前〉〈以降〉で差はなかったことから中学校以前の英語学習が中学校の話す能力に影響するようである。

また、専攻別では、〈キャ〉が「話す」能力を除いた技能に関して中学校から現在にかけて英語能力が上がり、際立った能力の高さを表した。〈英〉は中学校から高校にかけて能力の伸びを見せたが、高校から現在にかけては下がった。can-do リストのレベル段階が高校から現在にかけてあがり、難しくなっているにも関わらず、〈キャ〉は伸びを示し、特に能力が高かった。これについては大学での学習時間数、内容、意欲の充実が関係していると推測できる。中学校以前に英語学習を行い、現在において英語とのかかわりが多い人は現在でも能力が高いと考えられる。

次に研究課題③「中学校入学前に英語学習を開始した人の中で所属する専攻の違いで生じる動機づけと英語能力の違いはどのようなものか。」を考察する。研究課題①では現在の動機づけと能力はともに〈以前〉が高いという結果になった。また、研究課題②からは中学校から現在までの過程においても〈以前〉のほうが〈以降〉に比べて動機づけと能力はどの学校段階においても高かった。動機づけの変化は関心の高さに関係するため、〈英〉と〈キャ〉の動機づけが〈日〉よりも高いことから、英語学習に対する興味関心は高いと言える。英語学習に対する動機づけと能力は、どの学校段階でも〈以降〉より〈以前〉が高いことがわかった。しかし、このような〈以前〉と〈以降〉の結果以上に、専攻間での違いが動機づけと英語能力に差を与えていた。また、専攻別で動機づけと英語能力の関係を見ると比例関係にあることから、動機づけが高まれば英語能力も高まると考えられる。

意欲の変化を聞く質問 Q27と Q38において、学校段階が上がると〈以前〉の〈日〉は意欲が減少し、〈英〉と〈キャ〉は上昇していたことがわかった。また、英語能力の向上

を聞く質問 Q28と Q39で同様に〈日〉も〈英〉も減少したが、〈キャ〉のみが上昇していた。この結果から、〈英〉の動機づけと英語能力に関しては、話す能力では一致していないが、〈日〉と〈キャ〉においては、高校から大学にかけての動機づけと能力で同様の変化を示した。池中（2008）は英語学習に対する動機づけと英語能力の関係について、高い英語能力を身に着けるためには、「初期段階の早期英語教育を有効に行うこと」「次の段階で関心、意欲が継続的に持てるようなカリキュラムを作成する必要がある」（p.92）と報告している。これは、早期英語教育を行うにあたって英語学習に対する興味関心を持たせることが重要であると示している。したがって、英語能力の向上には動機づけが必要だと言える。本研究で〈キャ〉と〈日〉における動機づけと英語能力が比例した結果から、〈キャ〉は英語学習に対する関心が高く、〈日〉は早期英語教育の初期段階で興味をあまり持てなかったと言えるのではないかと推察される。また、喜田（2008）は「英語学習で積極的な多目的をもって学習している人は消極的単一目的のグループと比較して学力が有意に高い」（p.79）と述べている。つまり、中学校入学以前に英語学習を開始することで動機づけと英語能力が高くなると考えられる。また、動機づけを高めるには中学校以前の学習とその際に英語に関心をもつことが重要だといえよう。

7. おわりに

本研究は、東京女子大学学生を対象に、中学校以前の英語学習はそれ以降の英語の動機づけ、能力に影響を与えるのかを調査してきた。その結果について以下にまとめる。

まず、現在における動機づけと英語能力に関しては中学校以前に英語学習を開始した人のほうがどちらも高くなっていることがわかった。さらに、中学校入学以前に英語学習を開始した人の中でも、専攻差によって動機づけや英語能力の高さは異なることが分かった。英語に関係のある専攻に所属している〈キャ〉が最も高く、次に〈英〉の動機づけと英語能力が高いことが分かった。

その理由は、英語学習を開始した時に英語に関心意欲を持つかどうかにあると考えられる。JASTEC プロジェクトチーム（1994, p.42）は「早期英語教育は、学習者の現在の学習だけでなく、将来の英語および英語以外の外国語学習に対する学習意欲を高める役割を果たす」と述べている。また、「諸外国文化や諸外国の人々の価値観を理解し、学ぼうとする積極的な態度」を持つとも述べている。このことから、早期英語学習経験者は、語学学習に限らず、幅広く外国に関することに興味を持つ傾向にある。〈キャ〉や〈英〉で動機づけと能力が最も高かったのは早期英語教育のこの恩恵を受けていると考えられ

る。一方、〈日〉が〈以前〉の中でも動機づけと能力が低くなったのは英語に対する関心を英語学習開始時に持てなかったためだと考えられる。本研究でその要因についてはわからなかったが、初期の英語学習で英語に対して不安や抵抗感、または先生が嫌いなどといったネガティブな感情を持ってしまったためかと思われる。

また、中学校入学前に英語学習を開始し、英語に関心を高く持った〈キャ〉や〈英〉の人は中学入学後も動機づけは高く、学習を行うため英語能力も高まっていったのだと考えられる。したがって、〈日〉についても同様の関係が説明できる。初期に英語に対して関心を持てなかったため、動機づけは上がらず、学習もテストや受験のためとなるため〈英〉と〈キャ〉と比べて動機づけと能力は低くなったと言える。

このように考えると中学校入学以前の英語学習はその後の英語に対する関心、さらにはその後の英語能力にも影響するものとして重要な役割を果たしているといえる。

本調査の結果、中学校以前に英語学習を開始することが、その後の動機づけや能力を高めると分かった。しかし、中学校以前のどのような活動が高めるのか、興味を引く効果的な学習方法は明らかにできなかった。また、今回はグループごとに焦点をあてた研究となったため、個人の環境など詳細に触れられなかった。したがって、今後、英語への関心意欲を高め、動機づけや英語能力を効果的に伸ばす学習方法や、環境要因の研究に期待したい。それを踏まえて、注目されている小学校英語教育など早期英語教育のさらなる発展を望む。

引用文献

- EF Education First <https://www.efjapan.co.jp/about-us/highlights/2017/ef-tokyo-olympics-partnership/> (2017.12.5閲覧).
- 英語 4 技能試験情報サイト (2016)「CEFR について」(<http://4skills.jp/qualification/cefr.html>) (2017.10.30閲覧).
- 池中雅美 (2008)「早期英語学習経験と英語力および学習態度に関する研究」『北陸学院短期大学紀要』40巻 pp.85-94.
- Iwata, Kyoko (2012) "Influence of early English education on later English ability" 『JACET 中部支部紀要』10巻 pp.81-95.
- JASTEC プロジェクトチーム (1986)「早期英語学習経験者の追跡調査－第Ⅰ報」『日本児童英語教育学会研究紀要』第5号 pp.48-67.
- JASTEC プロジェクトチーム (1987)「早期英語学習経験者の追跡調査－第Ⅱ報」『日本児童英語

- 教育学会研究紀要』第6号 pp.3-21.
- JASTEC プロジェクトチーム (1988)「早期英語学習経験者の追跡調査－Ⅲ報」『日本児童英語教育学会研究紀要』第7号 pp.43-63.
- JASTEC プロジェクトチーム (1994)「早期英語学習が学習者の英語および外国語学習における態度と動機に及ぼす影響」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』第13号 pp.35-48.
- 喜田慶文 (2008)「英語学習意識と英語能力の相関性に関する調査－観光系学生の英語能力と動機づけに関する事例研究」『観光学研究』第7号 pp.65-81.
- 松宮新吾 (2009)「早期英語教育が中学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究 (第一次調査)」『関西外国語大学研究論集』第90号 pp.139-158.
- 恵達二郎・横川博一・三浦一郎 (1996)「早期英語学習経験者の中・高における成績」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』第15号 pp.27-35.
- 文部科学省 (2008)「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」〈http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_012.pdf〉(2017.12.5閲覧).
- 日本英語検定協会「英検 Can-do リスト一覧」〈<http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/cando/list.html>〉(2017.7.12閲覧).
- 岡田涼 (2010)「小学校から大学生における学習動機づけの構造的変化-動機づけ概念間の関連性についてのメタ分析-」『教育心理学研究』第58巻 第4号 pp.414-425.
- PRESIDENT Online (2016.4.20)「東京オリンピック、日本人の英語力で「おもてなし」できるか？」〈<http://president.jp/articles/-/17827/>〉(2017.11.30閲覧)
- Takagi, Akiko (2003) “The effect of Language Instruction at Early Stage on Junior High School, High School, and University Students' Motivation towards Learning English”『全国英語教育学会紀要』第14号 pp.81-90.
- 高橋美由紀・大野直子・柳善和 (2016)「外国語活動で要請された「聞くこと」「読むこと」の能力について－グローバル化に対応した英語能力の測定－」『愛知教育大学研究報告 人文・社会科学編』65巻 pp.131-144.

Abstract

This study investigated differences in motivation for learning English and abilities in English between those who learned English in childhood and those who did not. In addition, whether motivation for learning English and abilities in English differ according their majors in university was examined in detail.

The research used a questionnaire composed of 41 questions. The contents of the survey were time of starting to learn English, English motivation, English abilities, and experience taking certification examinations in junior high school, high school, and university. The

questionnaire data from 101 Tokyo Woman's Christian University students was analyzed.

Results showed that students who have high motivation for learning English also have high abilities in English. Furthermore, early English learners have high motivation to learn English both at present and in the future. In addition, both motivation and English abilities of students in the Career English Program and English literature majors became higher now than in junior high school days, whereas those of Japanese literature students fell. Based on these findings, it could be said that learners who are interested in English due to starting to learn English at an early stage have high English motivation and high ability even after junior high school.

In conclusion, this study shows the importance of learning English at an early stage. In the future, to ensure the validity of learning English at an early stage, a more detailed survey about effective English learning and teaching strategies for enhancing interest in English should be conducted with a larger participant sample.